

令和六年度

龍谷大学付属

平安中学校入学試験問題

受験番号

国語

解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があったら解答用紙をおもて向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。（問題を持ち帰ることができません）

問題は次のページから始まります。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

これはぼくには無理！ と思っていたが、インド生活をつづけるうちに、男友だちと肩を組み、手をつないで歩けるようになった。そういうもんだ、と慣れてしまえばなんてことない。※オートリクシャーに乗っていて目に埃が入ったとき。隣に座っていた友だちが無言のまま、両手でぐっとぼくのまぶたをおさえ、顔を急接近させてきた。ナニコレ!? と固まると、鼻先二センチぐらいのところから、唇をとがらせぼくの目玉をフーフーと吹いている。これにはびびった。

息で目のゴミがとれたためしはなかったが、同じような光景は映画のシーンでよく見かける。こちらも仕草としては特別な意味はないようだ。

公的な場所では、異性との距離は常に保たれている。お寺によつては男女別の入口や行列があるし、バスや電車の女性専用席も昔から当たり前の※システムだ。

だが、ひとたび同性となれば遠慮はいらない。バスや電車の席にちよつとでも隙間があれば、入りこんでくる人がいる。まるで何十年来の幼なじみのような顔で、すつと入ってきて、ペタツと横にもたれかかる。なんとも絶妙だ。

一度気を許したら、あとはズブズブ。ちよつと詰めてよ……とすこしずつ押され、一〇センチほどの間が一人分の席となり、気がつけばその隣にも人がA座ってる。一人席に二人、二人席に五人はいける。いまだに田舎では、人がたくさん乗れる車が重宝されて、五人乗りのワンボックスから二〇人を超える人がドバドバ降りてくる。乗り合いバスでは、お客の膝の上に他の客を座らせ、折り重なった超密着状態のまま輸送される。

東京の満員電車で迫る人口密度だが、①不思議と日本のよう

な息苦しさはない。できるだけ他の客とかかわらず、別のことを考え、目も合わせずにいる満員電車とはだいぶ違う。もちろん外国人への好奇の目もあるが、みな親しく話しかけてきて、何かしらかわりあいをもとうとする。

「パーソナルスペース」という言葉がある。他人にふみこまれると不快に感じる空間のことだ。嫌悪感の半径といってもいい。その範囲は親密な相手といるときは狭く、そうでない相手に対しては広くなる。親しい友だちとは肩を並べられるが、嫌いな人とは同じ部屋にもいたくない。

しかし、つい最近まで、ぼくはこの言葉の意味を真逆に取り違えていて、「パーソナルスペース」は、自分が楽でいられる半径のことだと思ひこんでいた。いわば愉快の半径。満員電車のなかなど居心地が悪いときはギュッと狭いけど、友人の家や居心地のいい店ではぐんと広くなる。という日本語にも似た感覚だ。

②その解釈でいくと、インド人のパーソナルスペースはかぎりなく広く、道路の向こう側を歩いている見知らぬ人とも、すぐにも話しはじめられそうだ。

人はそれぞれ大小の円をもっていて、他人と近づくと円が重なる部分が生まれる。そこではじめて他人同士が触れたり、話したり、つくったりできる。どんなに理想やシステムがあつても、③集まった人の円が小さく、重なる部分がないと何も生まれない。「※パブリック」つて、だれかが用意するものじゃなく、そういう重なり合いの空間のことじゃないかしら。

インド人の家に招かれると、挨拶もそこそこに家の中を案内してくれることが多い。ここが寝室だよ、ここが風呂、お祈りの部屋……と隠さず見せる。年ごろの娘さんの自室もおかま

いなし。バーンとドアを開けられて、こっちが戸惑うくらいだ。ひと通り部屋を見終わったあとにリビングに戻り、一緒にお茶を飲む。

はじめは単なる家の自慢だと思っただが、そうじゃない。この④お宅拝見タイムがあると、無意識に自分の半径が広がって、その家の居心地がよくなる。なにせ、はじめて来た家なのに、台所にどんな鍋が並び、娘さんがいま何しているのかまでわかってしまうのだ。自然と気持ちがあがゆるみ、Bしておしゃべりを楽しめる。このなめらかさは、電車の席の隙間にと入りこんでくる、あの絶妙な間とも似ている。

ぼくは「空気を読めない」という言葉が嫌いだ。空気を読めない、とだれかを批判する人ほど、愉快の半径が狭く、余裕がないように見える。

インド人の距離の近さの前には、⑤空気を読むも読まれるもない。ちゃんとお互いのからだの輪郭がわかれば、多少唐突な入口であつても、不思議とリラククスして話ができる。なれなれしくて疲れることもあるけれど、これでいいのだ、と思わせるいきおいがある。ときには相手のパーソナルスペースをこじ開け、空気をC変えてしまう。

ただ、この近すぎる間合いのせいで起きる面倒ごともある。「ピンポーン」

休日の朝からだれだよ、と玄関から顔だけ出すと、近所の人

が、家を見せてほしい、という。えっ？ いまから？ あまりの唐突な訪問にDするが、

相手はまったく気にしていないようだ。仕方なくねぼけ眼で、

「こちらが寝室で、あっちが台所で……」と案内する。部屋をひと通り回り終え、いったい何なんだろう、と思いつながら、リビングで一緒にお茶を飲む。どうやらほ

かに用事らしい用事はないようだ。日本ではありえないことだが、呆れるのも通り越し、⑥この大胆さがうらやましくなる。

(矢萩多聞 『たもんのインドだもん』)

※(文中のことばの意味)

オートリクシャー：三輪自動車を利用したインドのタクシー。

システム：方法。方式。やり方。

パブリック：公共。公なもの。

問1 文中のAとDにあてはまることばを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じものを二回以上使いません。

- ア ほつと イ ガラツと
ウ しれつと エ ポカんと

問2 「手をつなぐ」「目のゴミ」「乗り合いバス」の話から、筆者はどのようなことを伝えようとしていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア インド人は同性であれば人との距離が近いということ。
イ インド人は自分がしたいことを優先させるということ。
ウ インド人は誰とでもすぐに仲良くなれるということ。
エ インド人は知らない人にも遠慮はしないということ。

問3

——線①「不思議と日本のような息苦しさはない」とありますが、そのように感じるのにはなぜですか。それを説明した次の文のⅠ・Ⅱにあてはまることばを、それぞれ文中から指定した字数でぬき出しなさい。

東京の満員電車の乗客はⅠ九字Ⅱ過ごすが、
インドのバスの乗客はⅡ十七字Ⅰから。

問4

ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 足をのぼす／ひっぱる
- イ 顔が広い／せまい
- ウ 気が大きくなる／小さくなる
- エ 口が軽い／重い

問5

——線②「その解釈かいしゃく」とはどのような解釈ですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「パーソナルスペース」を愉快の半径とする解釈。
- イ 自分が楽でいられる半径を愉快の半径とする解釈。
- ウ 生まれた国によって愉快の半径は変わるとする解釈。
- エ いる場所によって愉快の半径は変わるとする解釈。

問6

——線③「集まった人の円が小さく、重なる部分がない」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 集まった人の数が少なく、人との間に距離があること。
- イ 集まった人で話をしてみても、考えが合わないこと。
- ウ 誰からも話しかけられず、それぞれが一人でいること。
- エ 他の人に関心を示さず、互いに関わりとうとしないこと。

問7

——線④「お宅拝見タイム」は筆者にとってどのようなものですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 家庭の違いを自然に受け入れさせるもの。
- イ 知らないうちに心を開いてしまうもの。
- ウ インドの暮らしを理解させてくれるもの。
- エ 日本人の心のせまさを痛感させられるもの。

問8

——線⑤「空気を読む」とありますが、「空気を読む」ことについて、筆者の考えとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人がどう思うかを考えることにとらわれると、自分をさ
らげだすことができず、息苦しい。

イ 人がどう思うかを考えることにとらわれると、他人に批
判的になり、かえって人を傷つける。

ウ 人がどう思うかを考えすぎることよりも、多少強引でも
人との関わりを優先する方がいい。

エ 人がどう思うかを考えすぎることよりも、自分がしたい
ことだけを考え、楽しく生きたい。

問9

——線⑥「この大胆さ」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 休日の朝でも早起きをし、リビングでゆったりお茶を飲
むゆとりを持つてること。

イ 休日の朝でも他人の目を気にせず行動し、何でも知ろう
とする好奇心があること。

ウ 休日の朝でも他人と家を行き来し、どこの家の家族とも
仲よく過ごせること。

エ 休日の朝でも用事もないのに訪問し、結局相手に自分を
受け入れさせること。

問10

筆者の考えとして最もふさわしいものを次の中から一つ
選び、記号で答えなさい。

ア 想定外のことが起きて疲れることはあっても、人なつっ
こく近寄ってくるインド人の距離感を、悪くないものに感
じている。

イ 電車でも家でもぐいぐい入りこむインド人と比べると、
周りに合わせて行動する日本人の性質を、誇りに感じてい
る。

ウ 「パーソナルスペース」が他国よりも狭く、知らない人
とはできるだけ関わらない日本人の不器用さを、残念に感
じている。

エ 周りを気づかなくて行動を決める日本人と違い、他人の目
を気にせず自由であるインド人の生き方を、迷惑に感じて
いる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学六年生になる俊介は、突然、「サッカーをやめて、塾に通いたい」と父の浩一と母の菜月に打ち明けた。日本最難関と言われる中学校を受験したいのだからと言う。難聴である妹の美音の小学校入学を控え、家計も苦しい中、俊介を応援しようとする両親は決意した。俊介は塾に、美音は小学校に通い始めてしばらくすると、浩一の母である光枝が家を訪ねてきた。

「あのね菜月さん、①実はもうひとつ話があるのよ」

急須に湯を注ぐ手を止め振り返ると、光枝がリビングのローテーブルで勉強をしていた俊介のほうをちらりと見た。俊介には聞かれたくない話なのだろう。

「俊介、勉強なんだけど、自分の部屋でやってくれないかな？」

「えー、なんで」

「ここでやっても集中できないでしょ。それに、おばあちゃんとお母さんで大事なお話があるのよ」

菜月がそう言うと、俊介は復習プリントを手の中に集め、「わかった」と素直に立ち上がった。俊介がいなくなると、ゴロゴロしていた美音はテレビを点けて、好きなアニメにチャンネルを合わせる。

「実はね、菜月さん。塾のことなんだけど」

ふうつと大きく息を吐き、光枝が菜月の顔をじつと見てくる。

「俊ちゃん、まだ小学六年生でしょう。こんなに早々と塾に行かせなさいいけないの？」

自分も夫も俊介の塾通いには反対だと、光枝がはっきりと断ってくる。

「でも、俊介が中学受験をしたいって言い出したんです。塾も楽しいみたいで、難しい問題が解けるようになるのが嬉しい」

て言ってるんですよ」

俊介は塾から帰るとすぐに、その日習った学習内容を菜月の前で話してくれる。教わった算数の技法を使って、複雑な計算問題の答えをわずかに数秒で出してくることもある。

「お母さん、おれ、勉強がこんなにおもしろいって知らなかった」と興奮気味に話す姿はサッカーで活躍していた時とまるで同じで、この子は打ち込めるものをまた見つけたのだ。菜月は義母に向かってそう説明した。俊介が

I を

なんとかわかってもらおうと、これまでの経緯を一つ一つ丁寧に話していく。だが光枝はそんな話にはまるで興味がないのか

「ふうん」と呟き、

「塾代って一年でどれくらいかかるものなの？」

と眉をひそめたまま聞いてくる。

「受験生の六年生で……百万くらいか」と

もつとかかるかもしれないが、少なめに告げておいた。

「百万？ おおこわー。塾にそんなお金かけてどうするの？」

うちは子ども二人とも、一度だって塾になど行かせたことがない。子どもは遊ぶのが仕事なのだから塾なんて可哀そうだ。

小さい時に我慢を強いられた子どもは性格が歪み、②ろくな大人にならない。菜月が言葉を挟む間もなく、光枝が批判的な言葉を重ねてくる。

「そういうえば菜月さん、※パートに出てるんですって」

「はい」

「働きに出ている間、美音はどうしてるの。さっき俊介に聞いたら、学童がどうか言ってたけど……。あの子の帰宅時間に間に合うようには、帰って来てるの」

「いえ……俊介の言う通り、美音は学童保育に通っていて、私が仕事を終えてから迎えに行ってるんです」

光枝は菜月の言葉に目を剥くと、「可哀そう」と首を横に振った。まさかこんな時間まで学童保育に預けているなんて思ってもみなかった、と①苦々しい表情で菜月を見つめる。

「美音をほつたらかしにしてまでパートに出なきゃいけないの？ 私はね、そもそも美音が普通の小学校に通うことも反対だったの。送り迎えやらが大変かもしれないでしょうけど、私は小学校もそのまま※豊学校に進んだほうが美音のためなんじゃないかって思ってたのよ。正直なところ、俊介の塾にお金がかかるんでしょう？ だからパートをする時間が欲しいんですよ？ だったら中学受験なんてしなきゃいいのよ。地元の中で十分よ。美音にも俊介にも負担をかけて、そんな子育てをしていたら、あなた絶対に後悔するわよ」

子どもたちは楽しくやっている、と繰り返して伝えても、光枝は聞く耳を持たなかった。小学生が塾に通うことなんて、いまは珍しくもないのに。

②私はてつきり菜月さんは母性愛の強い人だと思ってたわ。俊介が生まれてからはちゃんと仕事も辞めたし、家において家庭を守ってくれたのに……子どもたちが可哀そう」

③何度も「可哀そう」と責められているうちに、菜月の頭の中でなにかが弾け切れるような音がした。自分にしても、美音を学童保育に通わせることにはためらいがあった。でもあの子は日々成長しているし、新しい環境を楽しもうとしている。美音ももちろん大切だ。でも俊介も大切で、お金も必要で、自分が働かなくてはいけない……。ようやく折り合いをつけた気持ちを揺さぶられ、どくんどくと心臓が脈打つ。

可哀そう……。テレビも観ず、ゲームもせず、外で遊んだりもせずに一日五時間も六時間も勉強する俊介は可哀そうなのかもしれない。

可哀そう……。友達との会話もままならない美音を、放課後

まで学童保育所に預けるのは可哀そうなのかもしれない。でも本当に可哀そうなのは、IIじゃないだろうか。

自分に自信が持てないことじゃないだろうか。

菜月は、俊介が「塾で勉強したい。中学受験がしたい」と言い出した時、驚いたけれど嬉しかった。戸惑いもしたが、でも息子が目標を持って、それに向かって頑張ろうとしていることが誇りしかった。その頑張りを全力で応援してやりたいと思ったのだ。

「お義母さん、俊介は将来やりたいことがあるらしいんです。それで、自分の夢を叶えるために行きたい中学があるって。私と浩一さんは、それを応援しようと思ったんです」

「そんな、子どもの言うことを④うのみにしちゃって。夢なんてね、叶えられる人なんてごくごくわずか、ひと握りなのよ」
「おっしゃる通りだと思います。私も夢なんて、持ったこともありませんでした。十七歳の時から必死でただ働くばかりで……」

高校を中退して就職したりサイクル工場では、荷台に山積みになされてくるパソコンや※OA機器などの産業廃棄物や家電などの機械製品を、ドライバーを手に分解した。分解したものはアルミや鉄、プラスチックなどに分別して※破砕機にかけるのだが、そこまでが自分の仕事だった。職場の上司や先輩は親切な人ばかりだったし、働くことは嫌いではなかった。けれど十七歳から十年間続けたその仕事は、自分が望んで選んだものではない。

「でも、私はダメだったけれど、俊介には夢があつて、もしかしたらその夢を叶えるかもしれない。まだ十一歳なんです。自分がやりたいと願うことを、好きなことを、職業にできるかもしれないんです」

俊介はなにも百万円のおもちゃを買ってくれとねだっているわけではない。勉強がしたい。中学受験に挑戦して、日本で一番難しいといわれている中学校に進学したい。そう言っているだけなのだ。正直なところ、進学塾がこれほど大変だとは思ってもみなかった。十一歳の子どもをここまで残酷に順位づけるのかと呆れることもある。春期講習の最終日のテストで、俊介は全クラス合わせて最下位だった。塾の授業中に行われる小テストでも思うようには点が取れず、ほとんど毎回補講を受けている。でも俊介は入塾してからこの一か月間、一度も弱音を吐くことはなかった。なんとか這い上がろう、遅れを取り戻そうと、食事をとる時間も惜しんで机に向かっている。④その姿は、義母が口にする「可哀そう」なものでは、決してない。

「お義母さん、俊介はいま毎日必死で勉強しています。その姿を見ていて私は胸が締めつけられるくらいに感動しています。すごいと思ってるんです。誇らしく思ってるんです。俊介は私の息子です。私が育てているんです。あの子の人生は私が責任を持ちます。だからお願いです、俊介には受験や塾に対して否定的なことを言わないでください。応援してくれとは言いません。でも全力で頑張る俊介に、⑤沿道から石を投げるようなことはしないでください」

途中から気持ちを抑えることができなくなり、涙が滲んできた。光枝に歯向かうのは、浩一と結婚して以来、これが初めてだった。

光枝は唇を固く結び、なにも言葉を発さず黙っていたが、やがて椅子から立ち上がりそのまま玄関に向かっていく。従順だった嫁の反抗的な態度に呆れ、怒り、許せないのだろうとその背中を見て思った。

よく言った、と菜月は心の中で呟く。自分の思いを、本心をきちんと伝えることができた。わが子を守るために強くなった

と自分を褒める。⑥高校を中退した時の悲しさや口惜しさは、いまこうしてわが子の盾になるために必要だったのかもしれない。

(藤岡陽子 『金の角持つ子どもたち』)

※(文中のことばの意味)

ローテーブル : 背の低いテーブル。

義母 : 結婚相手の母。ここでは、光枝のこと。

パート : 一日のうち、決められた短い時間だけ勤務すること。パートタイムの略。

聾学校 : 耳の聞こえない児童や生徒を教育し、技能を身につけさせる学校。

OA機器 : 電話やパソコン、コピー機など、事務作業の自動化に欠かせない機器。

破砕機 : がれきや廃棄物などを、こなごなにくたく機械。

問1

~~~~~線①②のことはについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① ろくな

- ア 有能な
- イ まともな
- ウ 温厚な
- エ おかしな

② 苦々しい

- ア 全く我慢できない
- イ 非常に不愉快な
- ウ 本当に悲しそうな
- エ とても悩ましい

③ うのみにしちやって

- ア 少しだけ信用してしまって
- イ 全面的に否定してしまって
- ウ なんとなく決めつけてしまって
- エ 無条件に受け入れてしまって

問2

——線①「実はもうひとつ話があるのよ」とありますが、光枝が話したいことはどのようなことですか。「〜ということ。」につながるように、文中から十一字でぬき出しなさい。

問3

Iにあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 塾の勉強に苦勞していること
- イ サッカーよりも勉強が好きなこと
- ウ 幼いころから算数が得意だったこと
- エ 積極的に塾に通っていること

問4

——線②「私はてっきり菜月さんは母性愛の強い人だと思ってたわ」とありますが、光枝が考える「母性愛の強い人」とはどんな人ですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子どもの夢を実現できるように、生活面でも金銭面でも協力してやれる人。
- イ 子どもに我慢させることなく、何でも希望をかなえてやろうとする人。
- ウ 子どものことを優先して働きに出ることなく、一緒にいる時間を確保する人。
- エ 子どもの遊ぶ時間を大切に、家にいる間は一緒に遊んでやれる人。

問5 ———線③「何度も『可哀そう』と責められている」と

ありますが、光枝が「可哀そう」と言うのはどのようなことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 遊びがかりの俊介を塾に通わせ、一年生の美音を遅くまで学童保育に通わせていること。
- イ 美音が俊介の中学受験のために、聾学校ではなく普通の小学校に通わされていること。
- ウ 俊介の中学受験の費用を準備するために、菜月が働かなければならなくなったこと。
- エ 俊介に中学受験をするようにすすめ、地元の中学校に行かせないようにしていること。

問6 ———線②「II」にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 仕事に就けない大人になること
- イ 夢を持たない大人になること
- ウ 努力をしない大人になること
- エ 勉強ができない大人になること

問7 ———線④「その姿」とありますが、どのような姿ですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 俊介が夢を叶えるために、食事をとる時間も惜しんで勉強に取り組んでいる姿。
- イ 俊介が春期講習のテストで勉強不足のため最下位になり、落ちこんでいる姿。
- ウ 俊介が、日本で一番難しいといわれる中学校を受験したいと強く訴える姿。
- エ 俊介が塾で一番になるために、弱音を吐かず毎回補講を受けている姿。

問8 ———線⑤「沿道から石を投げるようなこと」とありますが、どのようなことをたとえた表現ですか。それを説明した次の文のA・Bにあてはまることばを、文中から指定された字数でそれぞれぬき出しなさい。

俊介を直接 A 五字 わけではない光枝が、  
B 十四字 を言うこと。

問9

——線⑥「高校を中退した時の悲しさや口惜しさは、いまこうしてわが子の盾になるために必要だったのかもしいれない」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 高校を中退し、夢を追うことも断念させられてしまった菜月の悲しさや口惜しさは、夢の実現には勉強が必要だと俊介に気づかせるために必要だったのだろうということ。
- イ 高校を中退し、仕事も十年で辞めることになってしまった菜月の悲しさや口惜しさは、俊介に大好きな勉強を続けさせてやるために必要だったのだろうということ。
- ウ 高校を中退し、自分のやりたいことを仕事にできなかった菜月の悲しさや口惜しさは、夢の実現に向かって努力する俊介を守るために必要だったのだろうということ。
- エ 高校を中退し、すぐに就職して働かなければならなかった菜月の悲しさや口惜しさは、俊介に中学受験をさせる口実とするために必要だったのだろうということ。

問10

登場人物について説明したものととして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 光枝は俊介や美音のことが心配で仕方なく、子どもの気持ちを後回しにする菜月の育て方に口を出さずにはいられない。
- イ 光枝は自分の子育ての経験をふまえて、菜月が無理せず子育てできるように助けたいと考え、親身にアドバイスしている。
- ウ 菜月は子どもの将来を考えて、自信を持って子育てしており、光枝が俊介や美音の人生に口出しすることにたえられない。
- エ 菜月は悩みながらも責任を持って子どもの成長を支えようと決意し、光枝にも理解してもらおうと立ち向かっている。

三 次の状況に最も関係の深いことばをあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① たくさん本屋をまわってやっと見つけた本が、父の部屋にあった。
- ② 待ち合わせ時間になっても友人が来ず、何度連絡しても返事がない。
- ③ ダンスと歌が好きな同級生に「アイドルになったら」とは言ったが、まさか本当に応募してアイドルになるとは。
- ④ 母が弟に勉強をさせようとしているが、弟はまったく気にかけて今日も外に遊びに行っている。
- ⑤ 明日は遠足なので、早起きできるように目覚まし時計を準備しておく。

- ア なしのつぶて  
イ のれんに腕押し  
ウ 灯台もと暗し  
エ 転ばぬ先の杖  
オ ひょうたんから駒

四 次の——線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 有名なオンセン地を観光する。
- ② 秋は一日のカندان差が激しい。
- ③ 大阪で万国ハ克蘭会が開かれる。
- ④ フクソウを整える。
- ⑤ この漢字の問題はカندانだ。
- ⑥ 神秘的な光景に感動する。
- ⑦ 工事現場への立ち入りは危ないので禁止されている。
- ⑧ テストは実力をためす貴重な機会だ。
- ⑨ 子どもの貧困対策に力を入れる。
- ⑩ 災害に備えて食料を貯蔵する。

これで問題は終わりです。